

人間社会学部

試験問題冊子

(3月入試 3月6日)

国語

注 意

- ① 試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開かないこと。
- ② 問題冊子に落丁、乱丁があった場合は、試験監督者に申し出ること。
- ③ 試験監督者が試験開始の指示をしたら、ただちに解答用紙の所定欄に、受験番号を記入し、マークすること。
- ④ 解答は全て解答用紙に記入すること。
- ⑤ マーク式解答欄の指定された箇所以外は使用しないこと。
- ⑥ 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

注意 解答はすべて各問の下端の 内に指示された解答欄にマークすること。
なお、解答欄のうち、この試験で使うのは、マーク式解答欄の 1 14 のみである。

問題一 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

ただのファン、ではなく「推し」

あなたには「推し」がいますか？ 「推し」がありますか？

います！ もしくは、あります！という人、いたら（あつたら）いいなあと思ってる人、そういえば「推し」って最近よく聞くけどいったいなに？という人……いろいろでしょう。

「推し」とは、簡単にいえば、とても好きで熱心に応援している対象（人や事物など）のことです。もともとは、女性アイドルグループのなかで自分がもつとも熱心に応援しているメンバーを指すファン用語でした。それがここ数年のうちに、さまざまなジャンルのファンにも知られるようになり、いまや一般的に使用される言葉となっています。対象もアイドルだけでなくアーティストや役者やタレント、アニメやマンガやゲーム、ドラマや映画や舞台や小説、スポーツや物や事柄など、この世界のあらゆるものすべてが「推し」になりえます。

ここで「推し」についてはじめて知ったという人は、こう思うのではないのでしょうか。つまり「私は○○のファンです」というのを、いまだきふうに言うと「私の推しは○○です」ってことか！

a、すでに「推し」についてよく知っていたり、自分に「推し」がいる（ある）という人は、そういわれるとちょっと違うんだよね……と思うかもしれません。では、ただのファンと「推し」は、いったいなにが違うのでしょうか。

職場の同僚に、フィギュアスケートの羽生結弦選手はにゆうあづるのファンがいます。スケート大会の前後には熱心その話をしているので、かなりのファンであることは知っていました。でも私はなぜか、羽生選手を彼女の「推し」だと思ったことはなかったのです。

ある日、ふだんからおしゃれな彼女のネイルがとてもすてきだったので「そのネイル、すごくきれい！」と言ったら、「ありがとう！ これ、羽生くんの衣装をモチーフにしてもらったの」というではありませんか。その瞬間、私は、彼女にとって羽生選手は「推し」なんだ！ と気づいたのでした。

なぜ私は、彼女にとって羽生選手は「推し」であると認識するようになったのでしょうか？ そこに、ただのファンとは違う「推し」とはなにかを考えるヒントがあります。

ほかの例も見てみましょう。職場の別の同僚に、韓国のアーティストグループ BTS のファンがいます。ある時、彼女がジャケットの襟に SDGs (Sustainable Development Goals : 持続可能な開発目標) のピンバッジをつけていました。彼女は大学のジェンダー研究所の所長でもありましたから、それでつけているのだと思いましたが、すると「もちろんそれもあるけど……実は BTS が国連でのスピーチの時につけていたから、私もつけたくなって」とのこと。なんと SDGs のピンバッジは「推し」と同じ

ものを自分も身につけたいという、ひとつの「推し活」(「推し」にまつわるファン行動のことを「推し活」といいます)でもあったのです。

(中略)

どうでしょう？ これらの例から、ただのファンではなく、「推し」を推すファンのあり方が少し見えてきましたか？ ただのファンと「推し」では、好きの程度が異なるのはもちろんです。けれど、それよりも大きなポイントは、ファンである自分が「なにをするか」にあります。

私の同僚たちのように、好きな対象のイメージをもとになにかを生成してしまう、好きな対象と同じことをしてしまう、好きな対象の世界を現実で体感しようとしてしまう、など「推し」をめぐるファンはいろいろなことをしています。その対象をただ受け身的に愛好するだけでは飽き足らず、能動的になにか行動してしまう対象が「推し」である、と本書では考えます。

対象に働きかける

対象をただ受け身的に愛好するだけの段階から、好きという情熱に突き動かされ、なにかしたい！という気持ちになったら、まずはなにをするでしょう。

応援する、ほかの人にすすめる、グッズを集めるなどは、「推し」を推す、bです。自分が好きなものが活躍している姿を見て、「すてき！ 頑張れ！」と言いたい、自分が好きなものをもっと多くの人に知ってもらいたい、自分が好きなものをもっといろいろ見たい、そんな気持ちで、好きな対象をただ享受するだけの立場から、自分が対象に「なにかをする」行動へと駆り立てます。

テレビや雑誌やインターネットで見るだけだったアイドルやアーティストのライブへ行って声援を送ること、見る・読むだけだったアニメやマンガの感想をSNSに書いてみることに、ポスターやいろいろなグッズなどを集めたり部屋に飾ってみることに……ファンとして「なにかをする」ことは、その人を受動的なファンから能動的なファンへと変化させます。

自分から対象に働きかけることによって、自分は変化するのでしょうか。つまり、受動的なファンから能動的なファンへと行動が変化した時、ファンである自分のところは、なにか違うものになっているのか、ということですが。

それは逆でしょうか？ ところが変化したから行動が変化したのであって、だとしたらところが違うのはあたりまえなのではないか、そう思うのはたしかに当然です。

認知科学や心理学では、身体性認知 (embodied cognition) という考え方があります。それは、人間の認知活動をこころと身体からだと環境とのダイナミックなやりとりとしてとらえます。身体はこころの単なる入れ物ではなく、環境や状況は必要とする情報源や行動するだけの場所ではなく、感情は認知を妨害するものではないのです。身体や環境や感情は、人間の認知活動とわかちがたく結びついていると考えます。身体性認知は、こころから行動を考えるだけでなく、身体の行為から認知をとらえなおそうというアプローチでもあるのです。

応援すると魅力を感じる

身体性認知の見地から、応援について検討した研究があります。認知科学の三浦慎司^{しんじ}先生と川合伸幸先生は大学生を対象に、アニメ『あしたのジョー』の試合場面に登場するキャラクターを応援してもらい、その対象への好みや魅力度、強さを評価させました。参加者は、具体的な動作としては、大型モニターの映像に向かって大きな太鼓を叩く^{たた}ような動きでペンライトを振るように指示されました。これはアイドルのライブなどで見られる観客の行動と同じです。実験に参加した大学生たちは、ひとりを除き、『あしたのジョー』のアニメを観たことはありませんでした。実は、参加者には「アニメを見ながらペンライトを一定間隔で振り、振り方によってどのように動きのズレが生じるか測定する」というニセの目的を告げていました。ですから、参加者はすっかりペンライトを振るのですが、キャラクターを「応援」しているという自覚はないのです。

試合の場面はどちらが勝つともわからないもので、キャラクターは四人でした。実験には以下のような条件が設定されていました。四人のキャラクターはそれぞれ、実験参加者がペンライトを振っている時に活躍していた人、ペンライトを振っている時には活躍していなかった人という役割があり、それはキャラクターによって固定しないよう参加者ごとにカウンターバランスをとって割り当てられます。つまり、参加者にとってペンライトを振るといふ行為は同じでありながら、応援対象の活躍ぶりは異なっていたのです。もうひとつ、重要な条件があります。実験中にペンライトを振る、という行為には二種類ありました。ひとつは、先ほと言ったように、ライブでアイドルなどにペンライトを振るような動作です。もうひとつは、ペンライトを後ろに向けて自分の肩を叩くように振るといふ動作でした。これは、ペンライトを振るといふ動作は同じでも、ライブなどの振り方とはまったく似つかない動きです。

さて、実験の結果はいったいどのようなものだったのでしょうか。はじめて見るキャラクターについて応援しているという自覚もなまま一生懸命にペンライトを振ってみたら、こころになにか変化があるのでしょうか？

なんとおもしろいことに、ライブ鑑賞のようにペンライトを振っていた時に活躍していたキャラクターだけ、実験後の評価で魅力度が突出して高くなっていたのです。ペンライトを後ろ向きに振ったキャラクターや、ペンライトを振っているのに活躍していなかったキャラクターの魅力度は、実験前後で変化していませんでした。好みや強さには、どの条件でも違いは見られませんでした。四人のキャラクターに対してどのようにペンライトを振るかは、参加者ごとに変えていましたから、これはキャラクター固有の魅力度や好み、強さを反映した結果ではありません。

この実験からわかることは、応援しているというつもりはないのに、ペンライトを前向きに振った時、その先にいるキャラクターが活躍していたら、そのキャラクターが魅力的に見えてくる、ということなのです。それだけ、自分がとる行動はここに大きな影響を与えることがわかります。実験前にはほとんどフラットな状態だった参加者のところでさえこうなるのです。そもそも自分が好きな対象の活躍を、意識的に能動的に全身全霊で応援するといふ行為が、どれだけ対象の魅力度を爆上げするか、あらためていうまでもないでしょう。

ただ一方的な受け身のファンでいるのではなく、自分から対象に働きかけることに

よって行為が生まれます。すると、その行為はこころに影響して、また新たな行為となり、それがさらにこころへ影響を……というエンドレスな循環が起ります。この実験は対象が映像でしたから、応援によって対象の様子が変化するということはなかったのですが、対象が現実世界に存在するのであれば、応援によって対象が変化することもあるでしょう。声援に伝えてくれることだってあるかもしれません。そうなればさらに、こころに影響する要素は増えることになります。

このような循環の効果は、応援だけに見られるわけではありません。感想をSNSに書いたり、グッズを集めたりする行為も同様です。つまり、自分が好きな対象に働きかけることは、自分の「推し」に対する想いが際限なく増幅されていく、底無しソコの循環システムシステムのなかへとびこむことにほかなりません。「推し」のいる人たちが、そのような自分と「推し」のありようを「沼」と表現しているのはたしかにそのとおり、ある意味とても写実的ユとすらいえるのです。

(久保(川合)南海子 『推し』の科学)

※出題者注…カウンターバランス キャラクターそのものの魅力が結果に反映されることが無いように、各条件に割りあてるキャラクターを参加者ごとに変えたこと

問1 空欄 a に当てはまる語として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

1

- ① あるいは
- ② けれど
- ③ また
- ④ むしろ

問2 傍線部ア「ただのファンと『推し』は、いったいなにが違うのでしょうか」とあるが、筆者によるとファンと「推し」はどのような点で違うか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

2

- ① 対象が好きという情熱があるかないか
- ② 対象に魅力を感じてからの時間が長いか短いか
- ③ 対象の影響でなにか行動を起こすか起こさないか
- ④ 対象は「推し」であると自認するかしないか

問3 空欄 b に当てはまる語句として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

3

- ① 受け身のスタイル
- ② とっておきの切り札
- ③ 究極の目標
- ④ はじめの一步

問4 傍線部イ「身体性認知の見地から、応援について検討した研究」からわかることとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

4

① 応援を意図しなくても、指示されてとった行為が文脈的にキャラクターを応援するものであれば、そのキャラクターに魅力を感じるようになる。

② 応援したいと思っているキャラクターでも、その活躍ぶりにあわせた応援行動がとれなければ、キャラクターの魅力は感じられない。

③ キャラクターの状況と、そのキャラクターに働きかける自分の行為との関係が文脈的にあつていれば、単なるファンが「推し」になる。

④ いったんキャラクターに小さな魅力を感じると、そのキャラクターを応援する行動が自然と起きるようになり、それとともに愛好心が強まる。

問5 傍線部ウ「底無しの循環システム」とあるが、循環を起こすものの組み合わせとして最も適当でないものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

5

① 行為とところ

② 身体の動きと対象の魅力度

③ 対象への働きかけと対象への想い

④ 「推し」への声援と声援に応えてくれる「推し」

問6 傍線部エ「写實的」の意味として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

6

① ものごとの性質をまんべんなく写しだしている。

② ものごとの性質を際立たせて写しだしている。

③ ものごとの性質を芸術的に写しだしている。

④ ものごとの性質をありのままに写しだしている。

問7 本文の内容に最も合致するものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

7

① 体を動かしたからところが変化するということがある。

② 好きな対象が「推し」である。

③ 対象を飽きるまで愛好し続けることが、その魅力度を爆上げする。

④ 応援している対象が活躍してもしなくても、その魅力度は変わらない。

問題二 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

常識にあたる英語は、コモン・センスであって、これは「一般の感覚」という意味である。この言葉は、ラテン語のセンスス・コムニスの直訳であり、このラテン語は、さらにギリシア語のコイナー・アイステーシスの訳語である。そしてこのギリシア語やラテン語は、ともに「共通の感覚」を意味している。つまりここでは、常識は語源的にも「知識」ではなくて「感覚」の一種としてとらえられている。

しかし、この常識の語源であるコイナー・アイステーシスは、昔はいわゆる「常識」の意味ではなく、むしろ視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚という五つの「特殊感覚」に対して、それらのすべてに共通する感覚という意味で用いられていた（アリストテレス『デ・アニマ』Ⅲ、四二五a）。つまりそこにはまだ、世間的・日常的な意味での「一般感覚」という用法は認められない。

アリストテレスのいう「共通感覚」とはどんなものかという点、彼自身はこれをたとえば「白い」と「甘い」とを区別する感覚だとか、運動・静止・大きさ・数のような、共通的に感覚されるものについての感覚だとかいつて説明している。しかしこれではまだ少々判りにくい。もうすこし判りやすく実例をあげて説明すると、次のように言えるだろう。

私たちは砂糖をなめたときに「甘い」という。しかしまた私たちは、aな芸術作品とか、世間のきびしさを知らない若者に向つても、これを「甘い」と表現する。子供をやさしく抱いている母親の感触も「甘い」し、ロマンチックなヴァイオリンの音色も「甘い」。こんなふう^アに味覚以外のいろいろな場面で「甘い」という表現が用いられるのは、単なる比喩や連想だけで説明のつくことではない。

いまかりに、砂糖をなめたときの味覚からの比喩や連想で、ヴァイオリンの音色を「甘い」といったとしよう。bな観点から見れば、ここにはたしかに比喩や連想と呼ばれてよい機制がはたしているかもしれない。しかし本当の問題は、このような比喩や連想を可能にしているのはなにかということである。砂糖の味覚からヴァイオリンの聴覚へと連想が進んだとするならば、この連想を渡した橋はいったい何なのか、ということである。それは要するに、この二つの感覚に共通にそなわっているなんらかの感触、なんらかの気分のようなものである。砂糖をなめたときに感じとったのと同じ感触が、ヴァイオリンの音色を聞いたときにも感じとられ、そこで私たちは私たちにとってより親しいほうのcな表現を聴覚にも転用して、「甘い」音色ということであろう。

色が「白い」という場合と、場面が「白しろけている」という場合についても同じことがいえる。「しらじらしい」とか「しらけている」とかいうとき、たしかに私たちはそこに「白い」色からのなんらかの連想をはたらかせている。しかしこの連想の背後には、やはり「白い」色の視覚と「しらけた」雰囲気ふんいきの感じとの両方に共通なある種の感触があるはずである。

だから、「甘い」といつてもそれは砂糖をなめたときにdに生じる純粹な意味での味覚そのものではないし、「白い」といつてもそれは白紙を見たときの純粹純粹にdな視覚そのものではない。「甘い」にも「白い」にも、それが味覚や視覚とはまったく

別種の感覚領域に転用されても通用するだけのプラス・アルファが、つまりこれらの表現をそのまま他の感覚領域に移しかえても変化しないような、いいかえれば「甘い」がもはや味覚のことではなくなり、「白い」がもはや視覚のことでなくなっても、それ自身は同一のままにとどまりうるような、なにかの感触がある。この感触にもとづいて考えた場合には、ふつうは相互に比較したり区別したりできないはずの「甘い」と「白い」とを、共通の基盤の上で比較し、区別することができることになる。アリストテレスが「白い」と「甘い」とを感じわける感覚だといった「共通感覚」とは、実はこのような「感触」のことと考えてよい。

さきあげた「共通感覚」のもう一つの意味、すなわち運動・静止・大きさ・数などについての感覚という意味についても、eには右と同じことがいえる。これらの性質はたとえば視覚的にとらえうる物体の示す姿をあらわしていると同時に、聴覚的、触覚的な領域においても、私たちはまったく同じような性質をとらえることができる。私たちは音が動いたり止ったりすることを聞くことができるし、触覚的に大きさや数を感じとることもできる。ということはつまり、これらの性質が単一の感覚で感じとられている場合でも、そこにはこの単一の感覚の直接的な内容をなしているもの（たとえば聴覚の性質の時間的変化や触覚の回数）以上のなものか——つまり私たちがそれを「運動」と呼び「数」と呼んでいるようなものか——同時に感触されているということである。ここでもやはりこの感触が「共通感覚」の本態にほかならない。

さてこれが、アリストテレスのいう「共通感覚」すなわちコイネー・アイステーシスのおおよその意味である。さきに述べたように、このコイネー・アイステーシスがラテン語に訳されてセンス・コムニスとなり、それがやがて「常識」の意味に用いられるようになって、現代のコモン・センスという言葉になった。元来は一個人内部の感覚としてとらえられていた「共通感覚」が、いつどのような経路をへて世間的な「常識」の意味に転じてきたのかについては、ここでは詮索しない（カントの『判断力批判』（一七九〇年）においては、すでにセンス・コムニスの語が常識に近い意味で用いられている）。だがこのようにして意味の転化は生じたにせよ、私たちの用いている「常識」の概念とアリストテレスの「共通感覚」の概念との間には、どこかに隠された深いつながりが残っているはずである。

（木村 敏 『異常の構造』）

問1 空欄 a に当てはまる語として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

8

- ① 貴重
- ② 未熟
- ③ 粗悪
- ④ 豪華

問2 傍線部ア「単なる比喩や連想だけで説明のつくことではない」理由として最も適当でないものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

9

- ① 比喩や連想を可能にしている橋渡しとなっている何らかの感触があるから
- ② 比喩や連想を可能にしている橋渡しとなっている何らかの気分があるから
- ③ 比喩や連想を可能にしている感覚は、純粹な意味での味覚や聴覚そのものであるから
- ④ 比喩や連想を可能にしている感覚は、純粹な意味での味覚や聴覚以上のなものからであるから

問3 空欄 b、c、d に当てはまる語の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

10

- ① b 生理学的 c 味覚的 d 心理学的
- ② b 物理学的 c 生理学的 d 心理学的
- ③ b 心理学的 c 味覚的 d 生理学的
- ④ b 心理学的 c 物理学的 d 生理学的

問4 傍線部イ「純粹」の意味として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

11

- ① 飾り気がないさま
- ② 不純物のきわめて少ない水
- ③ 正統的であるさま
- ④ まじりけないこと

問5 空欄 e に当てはまる語として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

12

- ① 常識的
- ② 根本的
- ③ 量的
- ④ 画一的

問6 傍線部ウ「おおよその」の意味として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

13

- ① だいたい
- ② 重要な
- ③ 中心的な
- ④ 多様な

問7 本文の内容に最も合致するものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

14

- ① 私たちの用いている「常識」の概念とアリストテレスの「共通感覚」の概念との間には明白なつながりがある。
- ② アリストテレスのいう「共通感覚」とは、例えば「白い」と「甘い」とを区別する感覚である。
- ③ アリストテレスのいう「共通感覚」とは、例えば聴覚的「数」と触覚的「数」とを区別する感覚である。
- ④ 「共通感覚」とは元来、個人の内的な感覚としてとらえられていたもので、その意味の誤解が生じていた。

(以上)